

# 戦争の美学

## ロマン主義時代の琉球と中国の表象

浜川 仁

本発表では、バジル・ホール (Basil Hall, 1788-1844) を始めとして 1816 年に琉球を訪れたイギリス海軍士官たちが、いかにピクチャレスクの感性とまなざしで、日本の最南端の島を見ていたのかを紹介する。イギリス・ロマン期の感性は、リアルタイムで日本の南端を賞賛していたのである。いっぽう琉球とは対照的に、なぜか中国は負のイメージで語られるようになる。その理由を、アヘン戦争へいたる史的背景を通して考えながら、琉球と中国の表象は、どちらもピクチャレスクの感性と通底していることを明らかにする。

イギリスの軍艦ライラ号の艦長バジル・ホールは、1816 年 9 月から 10 月かけて琉球を訪れ、2 年後ベストセラー『朝鮮・琉球航海記』を出版し、琉球のことを武器、金銭、窃盗、刑罰のないユートピアのような王国であるとして広く西洋世界に印象づけた。ともに琉球を訪問した J・マクロード (John McLeod, c. 1777-1820) や H・J・クリフォード (H.J. Clifford, 1789-1855)、そして旗艦船アルセスト号の艦長マレー・マクスウェル (Sir Murray Maxwell, 1775-1831) もまた、異口同音に琉球を美化・ロマン化して描いている。

『エディンバラ・レビュー』(1818 年 2 月号) や『マンズリー・レビュー』(1818 年 7 月号) など、当時の定期刊行物からも、ホールの航海記が好評を博したようすがつたわってくる。じつは琉球のことをこのようにセンチメンタルに描いた記録はこの時期に集中しており、それまでも日本に鉄砲をつたえたとされるポルトガル人旅行家ピントや、ポーランド人士官ベニョーフスキーも琉球や奄美大島を描いていたが、信憑性の定かではないピカレスク小説といった印象をうける。またホールの交友関係はじつに広く、エジンバラの歴史家であるジェームズ・マカーシー (James McCarthy) 氏のホール伝からは、当時の出版業界を牽引したコンスタブルやマリーはもちろん、スコット、エッジワース、ディケンズ、バイロンなど、著名な文人たちと親しく手紙のやりとりをしているようすが伝わってくる<sup>1</sup>。

ホールの航海記がロマン主義時代の産物であるとしたら、逆にこのベストセラーは当時の文学にまったく影響を与えることはなかったか——。調べると、当時、ロマン派の王道を行く詩人であると刮目されていたモンゴメリ (James Montgomery, 1771-1854) という人の *The Pelican Island* (1828) という長編詩につきあたる。この詩の最後のカントーでは、琉球人をモデルにしたと思われる族長の老人——“a chieftain of renown,” “this imperial savage”——と孫息子が登場する。この老人と少年が、キリスト教の神をすすんで受け入れ、西洋人の歩んだ歴史をそのままリプレイしてくれるというような安易な期待のうちに『ペリカン・アイランド』はクライマックスを迎えるが、このふたりは具体的な歴史と文化の内実のない人間のフィギュアであり、畢竟、生身の人間そのものというより、そのピクチャレスクな素描にすぎないといえる。

もともと、美学はそのはじまりにおいて、人間の経験に根ざしたものであった。ヒュームは、美のもとになっているのは便利であるとか役に立つといった観念であると考えていたし、芸術作品の価値を見極めるためには、いろんな国々のさまざまな時代から評価の高い古典を何度も観賞しなくてはいけないと説いた。また周知のようにバークの美学論では、崇高は痛み (pain) と結びついていたいっぽうで、美は快楽 (pleasure) と結びついていた。

美意識が経験に根ざすというこの考え方に大きな変更を加えたのは、カントである。カントによれば、美しいものは「目的無き合目的性」(purposiveness without purpose) を備えており、そこに利用目的などはない。美を考えるにあたって、カントはまずバークのように、美と崇高を快と不快に分けて考えることからスタートするが、個人の欲求や好き嫌いから美の基準をつくることはできないことを理由に、色彩とか質量といった感覚的なものをすべてこそぎ落とし、究極的には形式 (form) のみが美を客観的に根拠づけるとした。

こうした背景の下で登場したピクチャレスクは、開拓や冒険ではなく、むしろ旅行や観光の時代の産物であったといわれている。ピクチャレスク芸術論では、痛みや快楽といった体感は、「滑らかさ」(smoothness) や「荒々しさ」(roughness) といった抽象的な概念によって置き換えられていく。ギルピンは「ある対象を、独特な描き方でピクチャレスクなものにするためには、一定の比率の『荒々しさ』が存在し『なければならぬ』」と説き、相対立する崇高と美の要素のあいだのバランスやコントラストといった絶妙の構図を見出すことに取り組んでいた。ギルピンやプライス、ナイトといったピクチャレスク美学の論者たちの関心も、自然そのもの

というより、もっぱら一流の絵画や庭園といった視覚芸術に向けられており、そうした限定された空間の中からある種の規則性や不規則性を見出そうとしていた。ピクチャレスクは一種の形式主義なのである。こうしてギルピンやナイトが「外部要因」をこそぎ落とすだけ落とした末、ピクチャレスクはついにスケッチ風描法にたどりつき、「趣味」や「感性」があらゆる崇高と美を物語ることになっていく。

ピクチャレスクの実践者は、じぶんが非現実を描いているという自覚がない。じぶんは現実をありのままに観察し、これを形式的に洗練しているのだと思い込んでいる。そこに描き出される風景や人物が、じしんの内面の偏見や矛盾のデフォルメに過ぎないかもしれないことに、まったく無頓着なのである。これが、ピクチャレスク美学が政治文化的信条やイデオロギーとひじょうに親和性の高い理由ではないか。その無意識の目的は、風刺の場合とまったく逆に、じしんの日常の現実を再確認し、補強することにあるのだ。

ピクチャレスクと観光の関係で大切なのは、このころの東シナ海がすでにかなり探検されていた——さらというなら貿易を通して日常化されていたという事実である。アルセスト号（マクスウェル艦長）とライラ号（ホール艦長）が、琉球へ立ち寄ったのは、外相パーマストンが派遣したアマースト卿の中国訪問使節団を8月9日に天津近くまで送り届けたあとのことである。清朝中国では、「カントンシステム」とよばれる制度の下、広州（カントン）のファクトリ（商館地区）が唯一の貿易拠点として西洋人のトレーダーたちへ開かれており、とくに毎年9月から翌年の1月にかけてのシーズン中は、特許商人の「公行」たちとのあいだで取引が活発に行われていた。1784年の帰正法（the Commutation Act）によって茶の輸入関税が100%から12.5%へと大幅に引き下げられ、イギリスとインドと中国を結ぶ三角貿易は、茶の需要の急伸とともに活発になっていた。そして19世紀初めの30年間にあたるロマン主義文学期においては、禁制品であったアヘンが主要輸出品目となっている。アヘンの製造大手の東インド会社では、徹底的なアヘンの品質管理がなされており、18世紀後半から19世紀の終わりにいたるまでの東アジアのアヘン産業は、ヨーロッパ人の手がけたうちでもっとも管理され、もっとも潤沢に資本が投じられた一大産業プロジェクトであったといわれている。

プレロマンからロマン期に中国を訪れた使節団の残した旅行記には、いろんな場面でピクチャレスクということばが使われている。こうして19世紀初めの旅行記が、中国や琉球にピクチャレスクな風景を見出したということは、イギリス人たちがそこに日常を感じていたという何よりの証拠である。リベラルな極めて現代的な感性で旅先の現実をとらえていたのである。中国やその縮小コピーであった琉球について、未知なるものはもうほとんど残されていなかったのだから、交易ルートを開拓し、じぶんたちの世界経済ネットワークに取り入れようと躍起になっていただろう。アジアに近代戦争の恐ろしさを知らしめることになるアヘン戦争は、当時もっとも進歩的なアダム・スミス（Adam Smith, 1723-1790）やデービッド・リカード（David Ricardo, 1772-1832）の自由主義経済学を信奉するマーチャントやトレーダーたち——貴族やジェントリの子弟——のバックアップによって、リベラルなホイッグ政権の下ではじまったことも忘れてはならない。ピクチャレスクは、オリエンタリズムを形式的にマニュアル化するころみであったといえるかもしれない。

同じくピクチャレスクな描写であったとはいえ、琉球については高く評価され、中国についてはダメ出しされているが、これはイギリス人のマーチャントやトレーダーたちが中国市場の拡大を切望していたという歴史的背景とともに理解しなくてはならない。ピクチャレスクな旅行記が、琉球を純朴な民の住むユートピアとして描きだしたのに対して、中国を観る西洋人のまなざしに映っていたのは、強欲で無能な政府によって自由と富を奪われた庶民という構図であった。そしてこのいっけん価値中立的な構図の要素を、構成要素として成り立たせていたのは観察者の海外市場開拓への欲望（意志）という美学上の外部要因であったにちがいない。

こうした欲望は、いかなる意味においても価値中立的ではありえない。イギリス人にとって魅力的な貿易相手ではなかった貧しい琉球が実際よりも美化され、自由貿易を通してアヘンを無理やり受けとらせてでも茶を入手したかった中国のほうは極めて愚劣で邪悪な存在として描かれているのである。この明暗を分けたふたつの国家イメージのどちらにも、政治的・文化的他者を飼いならしフレーミングしようとするピクチャレスクの美学が働いていたのである。

---

<sup>1</sup> 『パイロン事典』編集者の田吹長彦氏によると、1818年8月ホールはベニスにおいてパイロンとなんども「接近遭遇」している。